

「ほっっっっっっっっっっっっのおもてなし」

一般 香月 千寿

「チーちゃん、すまんばってん天神町のあの和菓子屋さんに行って、いつものお饅頭ばお歳暮に贈って来ちゃんしゃい！」

お婆ちゃんは、おん歳八五才。半年前までは、一人でいそいそと街へ出かけていたのだが、転んで背骨を痛めて以来、歩行も車椅子に座ることもつらくなり外出が困難になっていた。

「お歳暮だったら、私がデパートのカatalogで頼むから、おばあちゃんのもついでに頼んであげるよ！」……ところが、このお婆ちゃん、なかなかの頑固者。

「いいや！ いかん、いかん。デパートには無かもんが良かった！ どこでん無か、あの店の包装紙のあの饅頭やなかと、いかんと！」「ほれ、贈りたか人の名前と住所たい。あーそうそう、ポイントカードもあるけん、店員さんに見せてね。頼みますばい！」

「ふっっっっっっ。」言い出したら聞かないお婆ちゃん。私は仕方なく年内山積み仕事を前に、イライラした気持ちであわただしく年の瀬の街に出かけた。

店に着いて注文を済ませてポイントカードを見せると……。

「あー失礼ですが、〇〇様のお婆ちゃまの……」

「はい……家族の娘です」

「ああ！ やはりそうでしたか。この半年、ずっとお越しにならないので、みんなでお配しておりました。お優しく、素敵なお婆ちゃまですね！」

(……お・お優しいだと？ ス・テ・キだと？……お婆ちゃん相当ぶりっ子していたんだ……(汗))

「早速、お品をご用意させて頂きますので、こちらにお掛けになってお待ちくださいませ。」紅色の緋毛センの上にかけると、なんだか「ほっっっ」とした気分になった。「お茶をどうぞ……」と丁寧に入れられた玉露のお茶に、添えられた小さな羊羹を口に含むと、気分はさらに「ほっっっ」とした落ち着きを取り戻して行った。

「お待たせ致しました。本日は娘さまにお越し頂き、本当にありがとうございます。……失礼かとは存じますが、お店の新商品と試食品を集めたものです。良かったらお婆ちゃまのお見舞いに……。……ご試食後の感想をお電話いただたら幸いです！」と、店員さんの顔イラスト入りの名刺の裏に、お見舞いコメ

ントまで添えてくれたのだ。(なるほど……、お婆ちゃんが、この店にこだわるはずだ!)と再認識させられた。

その夜……、お婆ちゃんは、頂戴した試食品のお菓子を仏様にお供えして、何度も何度も名刺の裏に書かれたメッセージを、それは、それは嬉しそうに読み返していたのだった。その姿を見ていた私の心は、本日三回目の「ほっ……」とした気持ちに包まれていた。

介護と仕事の両立で疲れ果てていた私は、あわただしい年の瀬に店員さん方から頂いた「ほっ……ほっ……ほっ……のおてなし」の真心にそっと感謝の手を合わせたのであった。